

# 水牛通信

VOL.5 NO.2  
毎月1回・10日発行  
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

セタガヤママが試験電波をだした日 2

ラジオ・Fひとりだけの放送局 武内恵子 16

水牛楽団のページ 19

ラジオ・ポリバケツの九十日 20

壁新聞「同時代」二部二百円 「同時代」編集部

フリーピン教育演劇協会からの提案

マニユエル・バンビット 28

# セタガヤ・ママが試験電波をだした日

小田急線の経堂駅南口をでて十分ほどある。住宅地のなかのどこにでもあるような町角の小さな空地に、工事現場の飯場ふうのプレハブ小屋がたっている。錆びた鉄骨にベニヤを打ちつけただけのかんたんな造りで、道路に面した壁面にとりつけられた窓枠の色(ピンクと空色だったと思う)と、その特殊なかたち(窓のうちにもうひとつ窓があつて、それが二重にひらくのだ)だけが、さんぜんと光りかがやいているといった感じ。入口のところに「セタガヤ・ママ」とローマ字で手がきされた紙がピンでとめてあつた。

このバラックの主は平野公子さんと大橋正子さん。平野さんの亭主は、水牛通信のタイトル文字をデザインした平野甲賀さんである。

なんのための小屋なのか、この三人にもまだ正確なところはわかっていないみたいなのだが、ともかくも、このあたりに住んでいる人たちが思い思いの「生活実用品」をつくり、あるいはどこからさがしだしてきて、それを適正値段で売ったり買ったりすることを中心に、さまざまな活動をしていく共同の空間になるらしい。昨年の暮にオーブン。プリン。トゴッコで刷ったハガキ通信の第二号には、つぎのようなおしらせがのつていた。

開店一ヶ月、週に四日、日に四時間のまことにゼイタクな商いですが、思いもかけず家賃と電気代が出たのです。雨もりもせず、ガラスも割れず、背負われて店番につ

きあっている赤兎の風邪ひきもなく、ありがとうございました。  
二ヶ月目は、品物もふえます。セタガヤ・ママ特製「ゲンイチローのぬり絵」製作中。自由ラジオ放送局もいよいよ開局、一月二十二日、二十九日、二時より試験放送します。興味のある方は是非おいでください。  
その他○まねき猫のペンダント○男女パジャマ○あいのもんべ○木製がんぐ○ゴマのクッキー……。

その二月二十二日午後二時、つめたい風が吹きまくるなかを、技術指導の粉川哲夫センセイを先頭に、十人ほどの中年男女がぞろぞ

ろとこの「セタガヤ・ママ」にあつまった。ハガキ通信にある「自由ラジオ放送局の試験放送」とやらがはじまるのだ。

石山修武さんは建築家で、本誌でも「自分の家は自分でつくる」というインタヴュー記事を書いたことがある。はじめにふれたユニークな形態の「窓」とか、この店で売られている木馬や木の椅子などの製作者でもある。柳生弦一郎さん——かれもまた本誌でおなじみのイラストレーターであり、ハガキ通信にもしるされているように、目下「ゲンイチローのぬり絵」を製作中。林さんは西荻窪の八百屋さん「長本兄弟商店」の一員で、かれらも自由ラジオを準備している。それに水牛通信「友の会」のはえぬきのメンバーである(もしそういうものがあるとしたらの話だが)田中和男さん、などなど。

粉川さんの指導で送信機をセットする。といっても、秋葉原で買ったCBキットをテーブルの上にひろげて、アンテナをバラックの屋根にガムテープでとめただけ。十分もかからず送信可能な状態になった。参加者が何人かずつのチームにわかれ、ラジオをもって経堂の町をあるきまわる。どこまで電波がとどくかをしらべておこうという

のだ。オツ、きこえる、きこえる！ あたりまえだよ。まだドアのそとにでただけじやないか。百メートル。きこえる。二百メートル。オーケー。三百メートル。まだ大丈夫というわけで、結局、四百メートルぐらいのところまでは、テープで流しっぱなしの水牛楽団の演奏が手にもつたラジオからガンガン聞こえていた。他愛なくよろこんで戻ってきた一同、興奮のさめやらぬままに勝手な気焰をあげはじめ。

セタガヤ・ママとはなにかな

津野 だいたい半径四〇〇メートルは大丈夫なことかな。

甲賀(平野) なんとか五〇〇メートル。

津野 おどろくべきもんだね。

石山 五五〇〇世帯ですね、世田谷区の平均というよ。

津野 それは半径五〇〇メートルで?

石山 ええ。だから二万二、三千人はきける。

ア。パートを計算にいれないでね。

一同 へえ!

石山 ひとが日常あるく距離つてのが四〇〇メートルぐらいなんです。いわゆる奥さん方

がふつうあるてるのは。

津野 じゃあ、それより大きいわけだ。

石山 大人だけで平均一万人。

粉川 「大きなメデイア」になつちやう。

田中 だいたい千軒ぐらいまでが、なんとか相手がわかる、いちばんつきあいやすい範囲なんだってきいたことがある。だから、すごいね。そのなかの半分ぐらいが、こういうものに関心をもってくればいいわけかな。

甲賀 (林さんに) さっきの菊地さんっていうのはなにやってる人ですか?

林 写真の会社をもってるんです。それでいま『根の国』っていう、大平農園の、有機農業とはなにかっていうような映画を製作してるんですよ。

甲賀 そういうのがあちこちに点在してるんだよね、世田谷区なんかでも。そういうのをつないでいければ、結構いろいろやれるんじゃないかな。

津野 「セタガヤ・ママ」で?

甲賀 うん。

粉川 そのときね、ここに電話をかけて、それをラジオにつないじゃう方法があるのね。

田中 そうすると双方方向になるわけか。

粉川 うん。情報のやつたりとつたりができる。

田中 電話の声をそのまま放送できる。  
粉川 個人が放送に参加できる。

田中 うん。そうすると放送中に電話をかけたきて、いまのはどうかこうだとか。

平野 ここには電話ないけどね、ハッハ。もともとね、「セタガヤ・ママ」では商業放送をやりたいなど思ってた。近所の酒屋さんのコマーションヤルをいれたりさ。

石山 でも、この店のコマーションヤルがいちばんおもしろいでしよう。

田中 そう、それがいちばんだと思ふな。いまなにが入荷しましたとか、こういう本がありますとか、こまかいことをズーツと放送していくのがいいんじゃないかな、ねえ。

津野 その「セタガヤ・ママ」っていうのはなんなのか、ちょっと説明してよ。だいたいここにいる人も知らねえんじゃないか。

甲賀 うーん。なかなかむずかしいんだ。

公子(平野) うーん。

一同 ハッハッハ。

公子 かんたんにいつちやうとね、そんなにふかいモクロミがあつたんじゃない、たまたまここを一萬五千円で貸してくれるって話があつたから……

津野 土地代？

と信号があるでしょ。あれをわたって、またズーツと歩いてくの。

甲賀 じゃあ、ボランテア・センターのあたりかな。

津野 だつたらばくちより、もつとさきだ。ところで、この小屋は、平野、何坪ぐらい？

甲賀 これはええと、六坪ぐらいか。

津野 ベニヤ張りだ。

甲賀 黒テントの連中にてつだつてもらった。

柳生 さむいよ。

津野 さむい。さむいけど、でも、よかつたよ、ともかくもやつてみて。

柳生 あそこまできこえれば、まアいいなと思つたけど……

甲賀 やつぱり地図つくつて、きこえる範囲をきちんと記録しておいて、一軒一軒……

石山 ビラ、ですわね。

甲賀 そうそう。番組とかを聞いて、ポストにはおろこんでいて、だつたら一週間に一回なんかじゃなく、毎日でもいいな。

津野 三時から四時までとか。

粉川 おもしろいね。

津野 しかし、かなり奇妙なもんだつたよな、水牛楽団の歌をききながら町のなかを歩くつ

公子 ううん、建物もいれて。ここにね、こわれかけたプレハブの小屋がたつてたの。それをまるごと。で、こゝでなにができるかっていうのが最初で、商品をおこうとかなんとかつていうのは、はじめはあんまり考えていなかったのね。そのうちに、どうせやるんだつたら、いろいろなものをいっばい、自分たちでつくれるものはぜんぶ自分たちでつくりたり、あつめたりしたらいいんじゃないかな、そうしてみようかなと思ひはじめたんだけど、まだ一カ月……

津野 いま、いちばん目玉の商品つてなに？

公子 ふだん使えるものつてのをまず考えるから、はじめは食器がいちばんやりたかつた。食器をつくることをまず考えたけど、私

たちにはすぐそれはできないし、つくっている人のを買うとなると、ものすごい値段になつちやうわけね。で、コットウの古い食器を買つてきて売ることになったら、それには鑑札

がいるつてことがやつとわかつて……

津野 それは古物商の？

公子 うん。その書類をいま警察に提出しているところ。

津野 警察なの、古物商つて？

田中 ハハア。

公子 こゝで放送をはじめるつていつたら、もう三カ所くらい、やりたいつていうところまでできた。

津野 林さんとはどうやつてやるの、長本兄弟商会では……？

林 最初は西荻窪ではじめて……いま「あつちこつち商店会」つていうのが六軒ぐらいあるんです。レコード屋さんと本屋さんと食べるもの屋さんと飲み屋さんと、みんな五〇〇メートルぐらいの距離ですから、そのお店でみんなが共有できるテーマでやれば——だれかの講演なんかでもいいですわね。

津野 ああたりだつたらまた人口もすこいでしよう。

粉川 どこさ？

津野 西荻のほびつと村ですつて、上にはほんやら堂やプラサード書店があつて、一階が長本兄弟商会になつてる。

林 きよは大根があまつてるから買いにきてくれとか……

津野 八百屋さんであつたつて商品について、店頭のコミュニケーションだけじゃなく、そういうふうになにか説明してくれるつていうのはいいね。農場で録音をとつてき

林 防犯のほうですわね。

公子 盗品をあつかうことになつちやうから、それでこないだ子どもを背負つて、この格好でいつたら、「あんたも生活のために大変だろうから、まア、わるいことはしないように」つて……

津野 ハッハッハ。

公子 「アパートの部屋でやるの？」つて。でもね、しばらくのあいだ調査はやるみたいよ。だから、できたならそれをメインにしていきたいなと思つてるんですけど……。あと、つかう立場でつくれるものをイツコずつ、ていねいにつくつてみようかなと。

柳生さん、ようやく戻つてくる。

柳生 もうテープとまつてるよ。

田中 あつ、とまつちやつたんだ。

平野 どこまでいつた？

柳生 シミ抜き屋さんとかまで。

甲賀 シミ抜き屋さん！ ハッハッハ。

公子 あそこまできこえた？ スゴイ！

柳生 あそこまでいつたらテープとまつちやつたみたい。でも、けつこう歩くよ。その道、ズーツとまつちやう行くでしょ。そうする

てラジオで流したりとか。

林 農家の人の声をそのままいいですわね。こゝんとこちよつと天気があつたかすぎて、とれすぎたから、いま食べてくれ、早い時期におわるからとかつて……。

電波法をだしぬく方法

柳生 この送信機は自動車やなんかでやるつてのとおなじなんでしょうか？

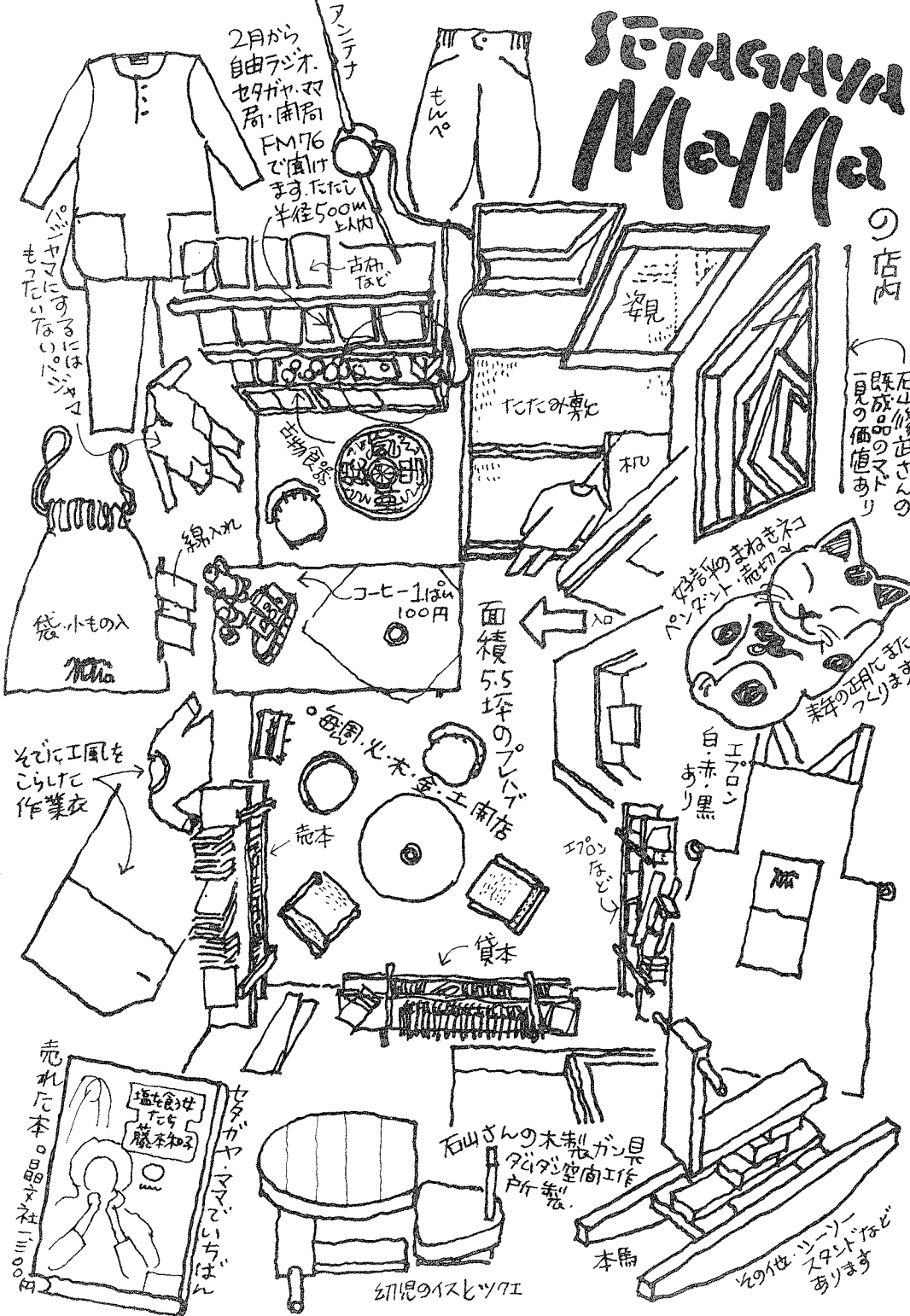
粉川 おなじです。だいたいこれは自動車用なんですわね。ただ、自動車用つてのはいまいろんなのがあつてね、この機械は自動車につみこめばすぐトランシーバーができるつていうフレコミで売つてるやつなんです。バッテリーにつなげばいい。

津野 いま「CB(シチズン・バンド)」のつしまりが強化されてるつていうのは？

粉川 トラック運転手の問題でしょう、口実にされてるの。ところが調べてみたらね、テレビに雑音をいれるとか、海上無線を妨害するとか、暴力団がネットワークをつくつたとかいふんだけど、実際はそうじゃなくて、メージャーのメーカーがやつてる技術ナントカ振興会つていう組織があるんです。そこ

# SETAGAYA Mamma

2月から  
自由ラジオ、  
セタガヤマ  
局・南局  
FM76  
で直け  
ます。た  
半径500m  
以内

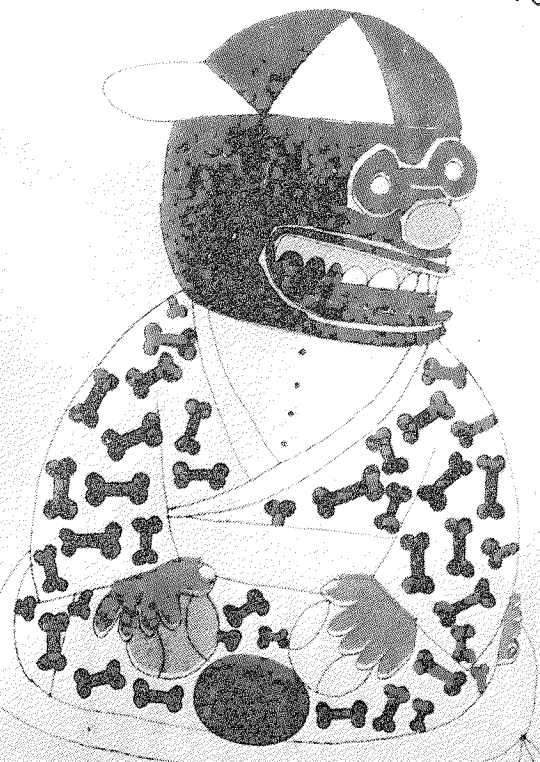


の店内

石山修武さんの  
既成品のマト  
見の価値あり

セタガヤマ1017の11  
(本館前)  
1階の右側を左に方面に  
お越しください

# ゲンイチロウのぬりえ GENICHIRO PAINTINGS



水牛通信でもおなじみの  
柳生弦一郎さんがぬりえをつくり  
ました。セタガヤマ  
オリジナルB4判  
700円

とびに工服を  
こらして  
作業衣

売れた本  
日曜社 1100円

石山さんの木製  
タタミ座間工作  
所製

本馬

この世、リリー  
スタキなど  
あります

が、いままでのオモチャとしてのC Bの機械を売りこむ利権を荒らされちゃってるわけね。というのは、つよいC Bっていうのは大阪やなんかの組合にはいってない小さなメーカーがつくってる。輸出用と称して百チャンネルとかさ、合法外の出力の機械をたくさんつくって、そっちのほうがどんどん売れちゃう。それをつぶすために、メージャーが郵政省とくんで法律改正をやったということらしいですね。

法律改正になって、つよい出力の機械を使用可能な状態でもっているだけで、ええと、二十万円以上の罰金、一年以下の懲役かな、そういうことになっちゃったんです、ことしの一月一日から。現行犯じゃなくてもパクれる。だから事実上、C Bはまったくつもらないものになっちゃった。

そしてそれと取り引きみたいになかたちで、パーソナル無線というのができたのね。それはいちおう出力はつよいんだけど、ひどいシステムでね。そのパーソナル無線の機械は振興会に属しているメーカーがつくってるんで、それをかうでしよう、そうすると申請書とオム・カートリッジというのがついてくる。その申請書に書きこんでオム・カ

ートリッジといっしょに電波管理局に送るんだって。向うはそのデータをコンピュータにぶちこんで、それをオム・カートリッジに記憶させて、個人個人に送りかえしてくるんだって。それをパーソナル無線の機械にセツトすると、電波をだしたときに、この電波はいまどこのだれがだしてるという信号がでる。電管のほうはそれをコンピュータで自動的にチェックできるわけね。違法交信の余地はいっさいない。

津野 ふーん。

粉川 そういうシステムをこんど開発したわけ。そういうかたちで完全な管理の網の目をはりめぐらしたんですね。ただ、いまわれわれがやってる放送は、電波法で「微弱電波」って規定されているやつで、一〇〇メートルはなれて十五マイクロ・ボルト以下ならなにをやってもいい。テレビでも短波でも、なにをやってもいいわけです。ふつうのFM放送の機械っていうのはだいたい四マイクロ・ボルトまで、きれいな音で聞こえる。それで計算していくとまあ五〇〇メートルぐらいまでは、合法の枠内でやれる。それを逆用しているわけですね。しかもね、きくほうには規制がない。すごいアンテナをたててきいてもか

いといてくれる？」って……

一同 ハッハッハ。

柳生 その人はなんかよくわかんないけど、おいといてくれる。そしたら個人中継所ができるんじゃない。

津野 そこんだけけど、中継っていうこと自体は違法になるの？

粉川 それがわかんないんだね。ある雑誌では中継できるってかいてあるし、べつな雑誌では中継はいけないってかいてあるし……

ただ、ひじょうにあいまいな規則だからね、規制がないと思うんですよ。

津野 やった人がいないわけだ、まだ。だから柳生さんのいうみたいに、たくさん個人中継局をつくったら、どんどんひろがっていく可能性もないわけじゃない、住民たちのネットワークさえできれば。

粉川 それと、さつきいったみたいに電話をつなげばね。

林 電話をつなぐには……？

粉川 いま千円ぐらいかな、電話用のマイクを安く売ってますね。あれを電話器の横ッ腹にくっつけて、リード線をマイクのとこにさしこめば、電話の音がぜんぶはいっちゃうんです。

田中 電話の録音機ですね、要するに。

柳生 じゃあ、電話がつかいっぱなしになるわけだ。電話料金はどんどんあがるわけですね。

粉川 たとえば放送しててね、途中で「青森のだれとかさんに切りかえしましょ」といえば、すぐでちやう。

甲賀 電話でインタヴューなんてのはかんたんにできる。

粉川 ふつうのラジオ屋にありますよ。

甲賀 電話っていうのは、意識しないで気楽にしゃべれるからね。

林 私たちの場合だと、農家の人が仕入部に電話をかけてくると、それをコピーして、翌日、消費者の人たちにわたすわけだけど、それが同時にできちゃうんですね。生産者から消費者に直接つたえたいメッセージなんかは、それをそのまま流してしまえばいい。それはもう、すごい実感がありますからね。

粉川 正式には放送法があって、コマーションやルやっちゃいけないとか、いろいろ規制がある。ところがこれは放送局とはほとんどみとめられないわけだから、放送法が適用されないんです。実際に、大きなビルのなかで会

まわらない。いま受信機の性能はすごくよくなってるから、いいアンテナをちよつと窓からだしてきけば、一キロぐらいはきけちゃうぞうですね、よわい電波でも。だからそれでいくと、法律が改正されないかぎり、そういういろんなことができそう。

津野 いまは送信するほうがいろいろ工夫してるわけだけど、きくほうがいっしょにやってくればもつとできるということね。

粉川 昔はさ、ウオークマンなんてあんな機械じゃFM放送なんかまるできけなかつたけど、いまはちがうもんね。

津野 両方がアンテナを工夫すれば一キロまでは大丈夫。そういうことですね。

粉川 ええ。

津野 直径二キロか。

粉川 直径一キロだったら、いまの機械でも大丈夫だからね。

津野 たとえば林さんとこあたりだったら、食品情報が必要だから自分でアンテナたてて、自転車にのつてすぐかけようなんて人だっているかもしれないよ。

柳生 あずけるのはどうですか？ この電波を受けてまた出すかんたんな機械を、どっかの家に「ちよつとすみませんけど、これをお

社の情報なんかを無線でやったりしてますよね。あれもこれを、というか、この規則にのつとったかたちで電波をだしてる。体育館とか学校の授業のときのワイヤレス・マイクなんかもそうなんです。

柳生 舞台で歌ってる人とか。

粉川 そうですね。だからこの法律がなくなれば、ああいうこともできなくなる。

柳生 ビルの中では、あいだに壁があっても大丈夫なんですか。

粉川 鉄筋でもなんでも、ぜんぜん心配ないですね。場所によってはいらぬときもあるんだけど、そういうときは、ちよつとアンテナを窓のそとにだしてやれば……。

田中 でも、なんにもなければ、もつとよくはいる……。

粉川 それはそうでしょうね。海上とか山なんかだったら、このあたりでやるより十倍くらい飛んじやうんじやないかな。

小さくなければできないこと

甲賀 これだと出力っていうか、だいたい何ワットぐらいあるんですか？

粉川 〇・一ワットぐらいかなあ。

甲賀 NHKなんかだと？

粉川 五十キロとか百キロとか。

甲賀 かなわねえなあ！

田中 だって、ふつうのオーディオだってすごい出力もってるもの。五十まではいかなけれど、十キロ、二十キロとか。あれをちゃんとかうと、そうとう飛ばせる。

粉川 オーディオのアンプにつかわれているトランジスターを送信機につかったら、たちまち百ワット、二百ワットいっちゃう。

柳生 でも、やっちゃいけないでしょ。

粉川 ハッハッハ。しかし、いまでも一万人以上がきけるんですからね。あまり大きいっていうのは、かえってよくないんじゃないかと思う。

津野 それは最初の石山さんの話じゃないけど、四〇〇メートルとか五〇〇メートルとか、ふつうのコンタクトできる範囲をきちんと押さえていくということだね。もつとひろげたいと思ったら、もうひとつ局をつくんなくちやいけないということじゃないと、ある濃密さっていうか、場所の特性がうまく生かせなくなってしまう。それこそ強圧的なメディアになっちゃって。

甲賀 でも、やってるうちにそういうメディア

アをもちたくなってくるぜ、きつと。

粉川 いや、世田谷のここしかきけないといつたらね、ききたい人はききにくればいいんですよ、ラジオをもつて。

林 車のなかでもきけるわけでしょ？

粉川 ええ。青山の「キッズ」なんていうのは、車でききにきてるんだってね。でも、まわりの住人はぜんぜん相手にしないんだって。通りを歩いている若者しか相手にしない。でもねえ、それはちよつとつまらないと思う。

津野 地域は無視すると。

粉川 あれはもともと音楽マニアの集団なんです。自主制作のカセットを売ろうと思つてたところに、このノウハウがむすびついて、電波でだしちやおうということになってはじまつたらしい。

田中 ここは地域放送だから、子どもにやらせてみてもおもしろいね。

公子 それは二月からやるの。そういう場合

だけど、たとえば子どもがいっぱいくるでしょ。そこで物語とかなんとかやるとして、子どもの雑音もいっしょにはいりますか？

粉川 はいりますね。このマイクだとワン・ポイントだけど、無指向性のマイクをつかえばぜんぶはいっちゃう。

田中 ふつうのラジカセのやつはみんなそうなんだよ。

粉川 天井から吊るしておいて、もう一本、個別のマイクを用意して……

公子 ふーん。

粉川 理想的にいえばね、いま和光の学生たちがやってるのは、ソニーからでてるミキサをひとつつかつてるんです。それだと四本、べつべつのソースをミックスできる。それをちよつとつよくしなけりやいけないから、エレキのギター・アンプのいちばん小さいやつをあいだにいれて増幅してやる。

林 その四つというのは……？

粉川 マイク二本と、テープ、プレーヤーですか。

田中 はじめはこれでやって、だんだんふやしていけばいい。

公子 きょうは音さええればいいの。

田中 そう、試験放送だもん。セタガヤ・ママ放送局、いんじゃないかな。ええと、セタガヤのSと……あつ、SM放送！

一同 ワッハッハ。

田中 ちよつとまずいな。

柳生 きこえた人は連絡してくれば、こつちからカードを送るとかね。そうしないと、

ホラ、どういう人がきいてるのか、気になるもんね。

粉川 そりやいいですね。

津野 はじめにビラくばるとき、そこにかいとけばいいよ。データがほしいから、ここを切りとって送ってくれって。

林 これは移動もできるんですか？

粉川 バッテリーでやれば大丈夫です、アンテナを背負って。自動車がいちばんかんたんです。飛びすぎちゃう。これは十二ポルトなんだけど、自動車のバッテリーは十三ポルトかなんだって。

柳生 じゃ、これもちよつとあげて、十三ポルトかなんかに。

津野 ホラホラ、みんなすぐ過激になっちゃいそうだな。

粉川 でもまあ、はじめは厳重警告ぐらいらしいから。

甲賀 だけど無線タクシーなんか、そうとうつよいんだろ。

粉川 あれは免許をうけてるでしょう、業務用だから。ただね、ああいうのは内容を規定されてるみたいですね。事務的な話はいいけど、音楽をながしちやいけないとか。アマチュア無線はね、技術の話しかしちやいけない

んです。しかし、こつちはなにも規制がないから、なんでもできる。

津野 たしかに盲点だったよな。ラジオは広範囲にやらないとつまらないと思つてたんだけど、小さくてもいいんだとみてしまえば、ひじょうにおもしろくつかえる。刷りものをくばって歩くなんていうのは、ぜんぜんちがうコミュニケーションだものな。

林 そうですね。

津野 これは水牛通信でもなんでもかふれてきたけど、金武湾の反CTS闘争なんかだと、村までは国の行政単位だけど、その下の区は国とは関係ないっていうんで、自分たちでもうひとり別の区長をえらびなおして、そつちに区費をおさめるようにしちゃったよな。与那城村の屋慶名区。去年亡くなった安里清信さんとこね。だから大きければダメだけど、いちばん小さなところでは、国の権力と自分たちの権力とを二重化できるんだと。住民たちの自己権力か。そうやって二重化できるつてところがポイントだよな、小さい範囲でやるつていうのは。

粉川 そこんとこまで国が規制しちゃうとね、こんどは国のほうが動きがとれなくなる。

津野 そりやそうだ。自発的な力をまったく

なしてやらなくちやならなくなつたら。

粉川 そがおもしろいところなんだね。

津野 昔の日本だったら、隣組までまっすぐ国の権力がとおつてたんだけど、その隣組を勝手に自分たちでつくつていくようにしないとな。そうなると町内会との二重権力ということになるのかな？ とまかくも、その感じをちよつと味わうというくらいのことではできるだらうね、ラジオをつかうと。実際にはそうじゃないと……

田中 ラジオは同時だからね。町内会は回覧板とかで時間的にずれてくる。

甲賀 「セタガヤ・ママ」なんていうのも、やつぱりそういう悩みでやってるわけよ。上からの力が個人のとこまで一直線にきちやつてるから、せまい範囲ではかえつてみんなバラバラになつてる。それをもう一回まとめたいからさ。

粉川 それにはラジオはひじょうにいいんじゃないかしら。

公子 こんどオバアサンたちがここにあつまつて、お汁粉をたべながら自分たちの老後について話しあいたいんだって。それをそのまま放送していいかってきいたら、いいよつていつてた。

粉川 オバアサン、オジイサンっていうのは、聴取者としてもたいへんいいんだ。場合によっては寝たきり老人のための放送とか。

公子 そう。老人の放送っていうのをワリとメインにしようと思ってるの。

津野 それはいいね。でも、オジイサン、オバアサンは話しはじめるととまんないぞ。

### 自分で家をつくる運動

柳生 それとここでこの機械を売るとかね。

「どこで買うんですか？」なんていわれるかもしれないから……

林 へたなカセット・デッキより安い。

粉川 なにかもひつくるめて、一万五千円ですんじやう。自主製作すればもつと安くできるだろうしね。

公子 このそとを通る人とかまわりの人とか、なにをやるうとしてんのかなあって思ってる感じがあるのね。窓からのぞいてったり、思いきってはいつてきてみたり。そういう人を待ちかまえてて話しかけるのも、なんだか押しつけがましいし……だったらラジオがいいかなってこともあるのね。

津野 それはあるね。

公子 もちろんはいってきにくれた人とはちやんと話すんだけど……

津野 要するにここはお店であると同時に集会所で、図書室でも放送局でもあると。たつた六坪のなかで、すごく欲ばってる。

公子 毎月一回、本だけ借りにくるっていう人もいる。そういう人たちと私たちの会話が、そのまま放送になっていけばいいと思うのよ。こちら側からのメッセージだけじゃなくてね。

柳生 夜になると、ここ、なにやってんのかわかるね、そこからでも、なかに明りがつくからね。

田中 そとに色ぬつたりしないんですか？

公子 ああ、それ、来週やります！

田中 ハッハッハ、どうもすいません。

平野 そのうちに石山さんにコルゲート・ハウスをたててもらうことになる。

津野 いまでもここには石山さんのつくった木馬と椅子と机と……

公子 小さい子ども用の椅子とテーブル、あとシーソーと。なぜかぜんぶすぐ売れちゃった。注文がたまってるの。

石山 マニラにもこういう店があるんですよ。建材とか部品だけ売ってる「フリーダ

ム・ツー・ビルド」っていうスーパー・マーケットがあって、市場価値の十分の一くらいで、なんでも売ってるんです。壁から基礎から窓から。そこはかなり理論もすっかりしてて、千五百世帯に一つずつ、そういう店をつくろうとしてるんです。そこまでやれば、そこから流れてくるものじゃなくて、自分のとこだけでやってけるらしい。そこはサラ地に一軒何千円で家をたてちやうような人しかいないわけですから……

津野 それはスラムじゃなくて？

石山 低所得者というか、そういう人のためのスーパー・マーケットですね。

津野 運動体なわけですか、それは？ 運動であると同時に商売もやるというか……

石山 まあ、そうですね。運動体としては世界的なレベルでやってて、南米からも社会学者がきたりしている。ぼくなんかの考えでは、いま世界でいちばんおもしろい建築上の動きだと思えますね。スーパー・マーケットがその核になって、そこにみんながあつまってきた町ができる。

津野 そういうヴィジョンの片鱗が「セタガヤ・ママ」にもあるんじゃないかと。

石山 ハッハッハ。

甲賀 そこはハーフメイドのものを売るわけですか？

石山 ハーフメイドじゃないんです。もつとどぎついいことをやるんです。たとえば日本製のサッシがありますね。それとおなじくみでもつて、それをラワン材でつくっちゃやうんです。そうすると値段は十分の一くらいストーンと落ちるわけですね。一五〇円で窓枠を売ってるとか……だからポケットに五〇〇円いれとけば、そうとうの部材を買っていきけるわけです。あと、完璧なマニュアルがあつて、それを買ってけば、かんだんに家一軒たつちやうんです。

津野 へーえ！

石山 もちろん一人でやるというのは苦しいですから、相互扶助というか、助けあうというのもシステムのうちにはいつて、日本の昔の民家のつくり方とおなじように、(結(ユイ)の民家がありますよ、あれとおなじように、何世帯かで一軒の家をだいたいい三週間ぐらいでつくっちゃやう。

津野 なるほどね。それがさつきいった沖縄の区なんです。そこから収奪されないために、結があつたって区をつくる。

石山 自分のお店もおんなじことだけど、

自分の家を自分でつくらない、他人につくらせるっていうことは、世界的にみても意外にすくないみたいです。ユーゴスラヴィアなんかでも、みんな自分の家を三年ぐらいでつくっちゃやうし、キチツとしらべてみたら、案外、自分のものは自分でつくっているほうがおおいんじゃないですか？

津野 そうかもしれないですね。いま日本でも若い人たちが店をだすとすると、空間だけはビルのなかの一室を借りるけど、内側は自分でつくっちゃやうもんね。もちろん長本さんとこはそうだし、そういうのを勘定にいれば、たしかにふえてはいるんだろうな。

林 日本の喫茶店なんかだと、どんどんきれいになっていくけど、みんなおなじ顔をしてるわけです。ところが若い人たちに人気のある店っていうのは、みんなユニークなんです。ていうのは、はいつてみるとわかるけど、店主が自分でつくっているんですね。友だちといっしょに。そこがいはば大きなちがいないんだと思う。

石山 さつき平野さんの奥さんがいつてたけど、なんか得味が知れない、わかんないってとこがどこまで長つづきするか、そこがぼくはポイントだと思うんです。「あそこは意外

とブティックよ」といわれたとたんダメになる。だから放送局であつて貸本屋であつて印刷所でもあつてというのがいいで、まわりの人が一つのカテゴリーにかんたんに入れるようになったら、まずダメだなあって気がしますね。

林 その部分が八百屋にはあるんですよ。

はじめは変つた八百屋だといわれるけど、一年たてばただの八百屋なんです。八百屋としてとおろすぎでしよう。だから私たちが放送局をもてば、それがまたわかんなくなるんじゃないかと。

津野 たしかにしくみをだんだん高度にしていけないと、一年たてばなれちやいますね、まわりの人は。そのつど工夫しなきゃなんないわけだ。こういう社会だったら。

林 と同時に、こわがつてる人もいるわけですよ。ふつうの八百屋とちよつとちがうと、はいつてくる人はまあ勇気あるんですよ。

そこそこを放送やれば、もつと大勢の人がはいつてきてくれるんじゃないか。オバアサンなんか、「あんたたち、がんばってるね」とはいつてきて、「バナナはないの？」と。

バナナもパイナップルもないと。なぜないのか、そういうことも放送できればいい。

甲賀 それはいいね。水牛楽団の「バナナ植民地」をながしといて……。

津野 石山さんここで窓だけ売ってるのもおなじ発想なんですか？

石山 あの窓はちがうんですけど、ぼくらのとこでいちばんおもしろいのは、宅送便で送る窓っていうのをやってるんです。宅送便っていうのはパッケージがきまってますでしよう。あのなかにちようど収まるように部品化して、宅送便で窓を送る。

津野 この店ではあの窓がホイントだもんね。あの窓だけでイメージができる。既成品の窓が安く買えてそれをほめこむっていうだけでも、ずいぶん遊べるもん。

粉川 あれでいくらぐらいなんですか？

石川 いや、あれは値段つけていないんです。甲賀 ハハハ。石山さんのとこにはもつといういろいろおもしろい窓があるよ。廃車のウインドウを利用したやつとか。

津野 椅子とか木馬とかっていうのはなぜ？

石山 ぼくのとこは住宅用の部材をアメリカから直接輸入してるんだけど、そうするとい木があるんですよ。はじめそれで積木をつくってたんですよ。積木っていうのも、ただ木をバラバラにして袋にいれて。それだけ

じやどうも能がないっていうんで、まず木馬をつくった……。

津野 石山さんとはほんとにいろんなものがあるもんね。家をつくったときにあまったもので、おもちゃをつくったり小さな家具をつくったり。

田中 どちらですか？

津野 四谷。四谷の市ヶ谷よりのとこ。

粉川 最初はあそこに放送局をつくらうっていつてたんだよね。

津野 そうそう。

どうネットワークをつくるか

石山 こういうワークショップはネットワークがないとおもしろくなくなってますね。ここは自由ラジオっていうアイデアだけど、一五〇軒というか、一キロ四方にイッコずつこういうのがあると、ものすごくおもしろくなってくる。

津野 石山さんとはダイレクト・メールですか。ハガキ新聞。

石山 ええ。でもなかなかうまくいかない。一軒だけの力っていうのはよわい。

公子 それはそうね。私たちがやりはじめた

からには、一キロぐらいいさきの人と知りあつたら、そつちでもやらないかっていうふうにやるだろうと思うのね。

田中 そういふ人はいるんですか。

公子 いますよ。いままでは同世代の女の人たちだけだったけど、ここを始めて、なにやってるのかなってのぞいてく人たちの範囲がすくひろがってきたから、これからどうなっていくかなっておもしろく思ってるの。

津野 小さいモノの売り買いつてのは、それ自体、こういう都会生活のなかでは人をつなぐ力になるでしょう。デパートとかスーパー・マーケットみたいなしかたで売らんじやなく、小さいあきないつてのは。商売つてことがそういう力をもってる。たとえばここでモノの売り買いがなくて、ただ集会所ですっていても、人はなかなかあつまつてこないんじゃないかな。

甲賀 それはもう絶対にそう。いままでやってのびなかつたのは、それをやらなかつたからね。

石山 建築なんかでも、たとえば地方自治体法つてのと商法つてのがあると、商法のほうがおもしろいんですよ。インタナショナルにとんでけるんですよ。電波法なんかの自治体

がらみの法律より、商法のなかの自由のほうが可能がある。そこをとおしていくと、わりといろんなことができる。

粉川 逆説的な面をもってるわけね。

田中 コカコーラが体制をこえて共産圏のなかにはいつちやつてくとか、そこんとこをつかってくわけだね。

石山 所沢っていうと、ぼくら、あれは西武だつて思つちやうでしょ。西武王国だ。あの基本にあるのは商法ですよ。それで国をつくつちやつて、価値体系なんかもぜんぶちがうわけですよ。交通もモノの値段も……：ジャイアンツ・ファンがへつて、みんなライオンズのファンになつて。

林 こないだもある人がいつてただけで、チッソ型社会つてのね、チッソが二七〇の会社を、旭化成とかなんとか、つくつてくわけですよ。二七〇の会社をつくつて、そのくせ学校は一つもつくんなかった。さらに新日鉄では、一棟五千世帯の平屋の住宅があるとある日そこについてみたら、三棟あつて、むこうがさわがしくて、こつちはシーンとしてるんですよ。二十四時間三交代制だから、お父ちゃんが帰つてるとこはワーツとしてるけど、お父ちゃんのいないとこはシーンとし

てるんですよ。そこでは学校にいくと、算数がつよくて社会科がよわいんですよ。新日鉄の社員のほかは、警察官と郵便局の子どものしかないんですよ。ニワトリのゲージ飼いや

考えというのは、八百屋をとおしてそれと逆のことができるんじゃないかと。そうじやない生き方をしたくても仕事がない。だったら仲間といつしよに仕事を自分でつくりだそうということですね。反撥だけだと生きるのをやめるしかない。もうそういうとこまできているということになるんですよ。

石山 たとえばここで布の切れはしを売るとしよ。これ、すぐキャパシティになつちやうと思つてますよ。こういうものをつかつて、こういうものができますよという情報をいつしよに売つてあげないと、この店の独自性がでないんじゃないかと思う。

公子 それはそう思つてたけど、それが本場に売れるものなのかどうか、自信が……

石山 ひとつの商品にかならずひとつの本がついてる。それならやつてける

津野 長本兄弟商会はもともと印刷物のおおいとこでしょう。

林 ええ。野菜を売りながらでは話しきれな

い部分を印刷物でおぎなおうとしてる。

石山 会員制のワークショップというのがいちばんいいでしょうね。地域二千世帯のうち五百世帯が会員になつたらすごいですよ。月に一回、はじめはウルシと地の木皿、つぎの月はサンショの粉だけとか、そういうプログラムをくんどくとおもしろいと思う。以前トルコの田舎にいったとき、泊つた家の人たちがジュウタンやなんかを売ってたんだけど、それにぜんぶストリーがいつてるんですよ。何代まえから布の切れつばしをあつめてというのを——たとえばおばあちゃんの着が古くなって破れてこれになつてと、それが曼陀羅の一部になつてる。そのジュウタン自体もきれいなんだけど、こつちはそのおばあちゃんの話してくれるストリーもからんで、あ、欲しいなと。

甲賀 それが石山さんのいう情報なのか。

石山 うん。物語つきのポロ布。

津野 ハッハッハ。後光がさしてないといけざとるのもラジオというところで、きょうはおひらきにしましょう。



# ラジオ・Fひとりだけの放送局

武内恵子

去年の夏の、代々木公園での送信実験を皮切りに、新宿歌舞伎町、大学のゼミと実験の場所は移動して、いま私は「ラジオ・F」をやっている。

しかし、ここまで決してトントン拍子に進んできたわけではない。私の通う大学の講師である粉川哲夫さんに、はじめて「自由ラジオ」の話を聞いたのは、第一回実験をさかのぼること一年にもなるだろうか。人文学部の悲しさ(?)で、私はもとより、周囲の人たちもメカにはほとほと弱く、肝腎カナメのハード(送信機)で、まずつまずいてしまったのだ。

どこの書店でも、コンピューター関係の本なら、当節、ゴマンと置いてある。その横で

小さくなっているのが、ラジオ製作の本。その中のほんの数ページに、FM送信機のことがついているのだが、内容的には子どものおモチャ。紙筒の糸デンワみたいなものだ。

粉川さんは、知り合いの技術屋から、なんとか聞き出そうとしていたが、いいところまで行くと、違法行為になると思っただけで戻されてしまったアウト。メカ屋とはずいぶん保守的なものだ。私にも、シンセサイザーやマイコンを自分で作ってしまう信じられない友人がいるが、彼の興味はもっぱらコンピューター・グラフィックスのような先端技術にあり、いまさらラジオもないだろうといった感じ。

そうこうして、やっとできあがった回路図

間の殆どを大学で過すのだから、当然大学でやろうと思った。

現在キャンパスは、色とりどりの張り紙や立て看(板)で、たいそうにぎわっている。ちよつと管理のキビシイほかの大学から見れば、学生の「表現の自由」は、かなり保証されているように見えるかもしれない。学費闘争はもちろんのこと、狭山裁判や金大中氏問題、優生保護法「改悪」阻止に反原発運動、あるいは学生による映画や芝居、コンサートのお知らせまで、あらゆるものがところせましと並べられている。

そんななかで、なぜ「電波」なのかと思われるかもしれない。今年「国際コミュニケーション年」、「国内テレビ放送三十年」にぶつかりあわせたとすることもあって、「ニュー・メディア」旋風が吹き荒れそうだが、それら高度情報システムを使って情報の「送り手」となり得るのは、国や独占資本のみ。われわれ庶民には、もう「オールド・メディア」の感のある「電波」ですら自由にならない。張り紙、立て看、ミニコミなどに至っては、「原始メディア」とさえいえるかもしれない。なにも、小さなメディアを否定するつもりはない。いままでのミニ・メディアに「電波」

が加わることによって、メディアの重層化が行われ、われわれの「表現の自由」がよりゆたかに、より活性化されて、あのイタリヤ・アウトノミア運動のような新しい形での人々の結びつきがなされてゆくならば、オモシロクなるぞ、というのだ。

いざやろうという段になって、ハタと困った。さきに、ハードで苦労した、と書いたが、ソフト(内容)に関してはそれ以上に弱り始めた。「受け手」としての姿勢が、骨の髄まで染み込んでいたらしい。この自由ラジオが地域と結びつく可能性も、もちろんあるわけだ。その場合、生活情報や住民運動など、その地区住民の生活に根ざした、利害を考えた番組になるはずだ。「学生」といっても「生活者」に変わりはない。「学生」という抽象的な身分など、マーケティングのためのものだ。学生として、一人の生活者として、感じたこと、気づいた点、ヤバイと思ったことなど、率直に話しあえる場となれば。キャンパスに咲き誇るさまざまな運動と連帯してやっていければ、と思った。

じつは「F」の前に、「ラジオ・ポリバケツ」の人たちと一緒にやったことがあった。いま

だったが、私たちを含め、一般の人たちがたしてハンダゴチや配線というめんどうくさい高等技術(?)をやりとげられるであろうか、という疑問が残り、結局、粉川さんが秋葉原で見つけてきた九千円足らずで買える「自動車無線」を利用することになった。この間、何回か秋葉原にもむいたが、「FM送信機」というコトバを口にするたびに、電気屋のオヤジにうさん臭さそうな顔をされ、「まるで、マリファナありますか、と言ってるみたいだ」と笑ったものだ。オカミのお達しだが、よく行き届いているとみえる。

後ろめたさなどあろうはずもない。聞こえる範囲は、合法の半径五百メートル以内。昼

まで述べたような私のラジオに対する思いに、彼らはきつと、そんなにリキむことなんかないと思うよ、と言うのではないだろうか。DJ志向、マイ・ペース型の彼らの足並みを乱すよりは、たつた一人でも自分の思うようにやつた方が良いと思っ、別のラジオ局を作つたのだ。

機材のセッティングからポスター作り、それにしやべつてくれる人を捜すことまで、すべて一人というのは、はつきりいって、ちよつとキツイ。「ポリバケツ」は彼らの作つているミニコミ紙を母体とした組織力があるが、私にはそれが無い。

十一月末、「ラジオ・F」開局。オープニングは、すこしでもみんなに知ってもらいたいと思っ、学生がワイワイたむろするサロンで放送した。通常はサロンには受信用ラジオを設置しておく。ほとんどの学生は、おしやべりに夢中。インタビュウしてみた。「自由ラジオ、どう思いますか?」。答えは「ウルサイ」。

キャンパスに人だかりをこしらえていた、一枚の張り紙について何人かの人たちと話しあった。精神的なパニック状態にある学生の、全学に対する公開状況だった。彼にも来てもら

い、マイクを向けると、いつもの無口はどこへ行ったのかと思うくらい、よくしゃべってくれた。マイクはカラオケにも似た、ナルシズムの満足感を与えるらしい。彼は自分に向かってしゃべっていたのかもしれない。この話し合いの機会は、学内における疎外、管理、あるいは意識の植民地化といった問題を明らかにしたばかりではなく、この時、一生懸命意見を言った人たちが、彼とまだに交流をつづけ、いろいろな面で援助をするなど、新たなコミュニケーションの輪が広がったということだ。

二日目を降は、学内で運動している人たちに来てもらって放送するつもりだったが、時間に遅れるやら、すっぱかされるやらで、予定通りに運ぶどころではなかった。そして、開局一週間を待たず、冬休みに入ってしまったのだ。

成果と言えば、「ゼミの公開放送」だろうか。その時間、他のゼミを取っている学生のために、あるいは、ゼミの閉鎖性打破、ゼミ間の交流の活性化に有効だろう。問題は、さきにも触れたカラオケ的ナルシズムの危険。それに加え、受信側からのフィードバック

もままならず、もしかしたら誰も聞いていないのではないか、という不安が気めいらすこともある。ポスターと放送で、「文句あるやつ、しゃべりたい人、おいで！」と呼びかけても、である。

テレビが全生活に渡って「価値」を作りだし、映像つ子が氾濫する現在、現代つ子にあって、「音」だけのメディアは魅力薄なのか？ 粉川さんによれば、「自由テレビ」も技術的には可能であるらしい。私自身、正直言ってかなりの視覚人間なので、「自由テレビ」に期待大である。もし、それが実現したとしても、「自由ラジオ」の成果、経験は大いに役立つことだろう。ラジオを捨てるのではなく、またひとつ、テレビという表現手段が増えたということなのだ。



去年の十二月十日の「どぶろくコンサート」のために「どぶろく」を作りはじめてからは、もうやみつきになってしまっ、欠かさず作り飲むという毎日を送っている。こんなに簡単にできて、うまい酒を自分たちだけで楽しんでいて、うまい酒を自分たちだけで楽しんでいて、うまい酒を自分たちだけで楽しんでいて、「密造共犯者」になりたい方はぜひご一報下さい。「どぶろく」のモトをお分け致します。

年あけての三日、ここのとこ毎年恒例になっている山谷越冬コンサートに出演すべく高橋宅に集まる。西沢さんは家族とスキーにでかけていて今回は欠席。しかし、集まったものの山谷現地からは何もいってこないの、少し不安になり、こちらから電話をすると、

なんと！水牛楽団によく出演依頼をしてくる山谷統一労組が、他の共闘団体から締め出されてしまっているとのことで、コンサートを用意ができていないということだった。一同啞然としたが、結局山谷コンサートはあきらめて、急拠、高橋宅における新春コンサートを開くことになった。お客は二人。一人はインドネシアの作曲家フランキー氏、もう一人は田川律氏。夜遅くまでやった。

一月二十三日、東京テレビセンターで、名古屋の犬山に三月オープンする子供の民族博物館「リトル・ワールド」の案内のための短い映画「みほこちゃん」の音楽を、アングルン、アウ（バンパイプ）、ピンなどで演奏した。一月二十五日から二月二日ごろまで、高橋悠治と八巻美恵は、カラワンとの交流のため二人きりでタイへ行っている。

これからの予定てたぶん確実なものは、二月十二日のNHKラジオ「くらしのカレンダー」と、三月四日「国をかんがえ歌をかんがえるコンサート」日仏会館、三月十二日には松本、県森講堂でコンサートをやる。

#### 68/71「赤い教室」開講

オペラ、演劇、朝鮮民衆文化の各ジャンルで毎年開講している「赤い教室」83年度の生徒募集が始まっている。

演劇の作り方 第一期 四月十一日から七月八日。第二期 九月六日から十二月二十三日。内容 演劇入門から、ワークショップを経て、ひとつの作品を上演するまで。講師 佐藤信山元清多、服部良次、遠藤啄郎ほか。オペラの学校 第一期 四月十二日から六月二十九日。第二期 九月六日から十二月十四日。

内容 ソング。詩を読む。掌編オペラ。新作オペラ上演。講師 林光、服部良次ほか。

教室会場は68/71の作業場（練馬区中村南西武新宿線都立家政駅下車）

なお、このほか大神楽の集中講義（七月）も予定されている。

講座「朝鮮の民衆文化」七月開講。

詳細は、黒色テント68/71（練馬区中村南一一九 TEL 03-926-4021）

それから今年の自主コンサートは、三月二十七日、二十八日、二十九日の三日間、渋谷のユーロ・スペースで開くことになった。定員が八十人位の小さなホールなので、少しちとけたコンサートにした。

だしものは、一部が水牛楽団のレパートリー中心のコンサート。二部はパフォーマンズ「神の道化」。ニジンスキーの日記。今世紀のはじめ、ロシア・パレー界に彗星のように現われた天才ダンサーのニジンスキーが、わずか十年の輝かしい活動のあと発狂し、踊ることをやめてしまった物語を、彼の残した日記から構成する。乞う御期待！

五月にカラワン楽団をよんで全国をまわる計画は、残念ながらキャンセルされました。（福山敦夫）

# ラジオ・ポリバケツの九十日

## 和光大学のフリーラジオ

仲間たちと去年から大学ではじめたフリーラジオ局はラジオポリバケツと呼ばれている。それ以前からFMの送信機は買ってあったのだが、しばらくはうちやられたままだった。それより、エコーマシンとマイクとテレ

声の反応があったりする。

主に顔見知りのレベルからフリーラジオが浸透してきたというし、見知らぬ人がFMウォークマンで聴きながら歩いていたり、油断のならないものである。

否定的反応も当然あるわけで、「電波の公益性を考えなさいよ！」とも「インキなのはきらいね」とも言われた。前者は、悪フザケが盛り上がりすぎたとき、後者は、外国語の翻訳について地味に体験的にはなしあつてい

たときのことである。「どういう意義性があるのかね？」と首をひねる人もいる。これは、フリーラジオの意義というより、ばくらがラジオ・ポリバケツでやっていることの意義への疑問なのだろう。そういう疑問は多少くすぐったく感じられる。意義と言わないまでも、なにか言いたいことがあつてはじめてたのじょうと問われて当然なのだが、それがあつたとしても、それをそつなく述べてよしとするわけにはいかな

コと若干の楽器類を持ちよつて研究室で遊ぶというようなことがたまたま楽しかったことに味をしめて、ついでにこれをラジオでオンエアすべえかということになったのだった。マイクにたかるハエのようにうちのバカさで、じゃあフリーラジオ局をやろうということになったのだった。楽しかった、というのは、なにかしらけていく予感があつたというようなことだ。どういうふうにやろうかという話の中で、「この間のバイキンがわいてくるみたいなのアレでいいんだよね」という発言に、「ラジオポリバケツになるわけね」という応えがあつて、それ以来そう呼ばれている。

大学の研究室棟の廊下に置いたテールに

いうようなところに、である。

とは言ってもそんな大きなことをしているわけでもなくて、要するに、大学の普段のつきあいの中にフリーラジオという回路をぶち込んでみたまでのことだと言つていいと思

う。あとは、それをどう動かしていくかということなのだが、ことが普段のつきあいだけにふつうのしやべりのレベルではなしがひ

らけていかなないと何も動かないことになる。一部ではDJ指向のラジオ・ポリバケツなどと言われているようだが、そこでも、一曲かけてはその場の全員にマイクを回して一言

ずつ感想を述べてもらうというような工夫が生まれてくるわけである。読書会をライブでオンエアするというのもやつていて、今年に入ってイリイチの『シヤドウワーク』をやつてい

る。機材をのせ、窓から外に出したアンテナが屋上に突き出た竹ざおの上に立っている。

そのテールまわりにむらがつて、通りかかる人を呼びとめては、井戸端会議風の放送をやっているわけである。

放送を始めてから、聴取者というものが必要なことに気がついて、学生サロンのゴミ箱の上にラジオを置いて流しておくとか、あるいはプログラムをマジックで書いたチラシを所かまわずはりつけて歩くとか、ラジオを持ったサクラを頼んだりもした。

いまではかなりの人がフリーラジオ局の存在を知っているし、研究室などでラジオのダイヤルを合わせてくれる人もいくらかいるようになった。廊下のかなたのドアが開いて大

それぞれの生活にそつたラフなものになった。そこが面白い。

などなど、いくらか感じをつかんでもらえればうれしいのだが、ラジオ・ポリバケツは知らない人には相変わらず聴き苦しいシロモノかもしれない。しかし、「ノイズとは聴かれなかった音だ」というように、多くのノイズを含みながらオンエアされつづけていくわけであり、ノイズは聴いてもらえる声になりたがつているに違いないラジオポリバケツの今日この頃である。(本江年菰)

## ラジオポリバケツ日記

一九八二年十月某日 研究室にエコーマシン、テレコ、楽器を持ち寄り、音楽をバックにマイクに向かってしやべる実験を行う。

エコーマシンが活躍する。DJの真似ごと

やそこらにある文章を朗読するか勝手にしやべるとかしてみるが、K君の石焼いも屋の口上が一番面白い。和製ラップミュージックやダブの創作ならず。

十一月某日 FM放送の実験。手持ちの機材ではこれがベストと思われるセット決まる。アンテナを外に出すと同軸ケーブルの長さが足りないの、やむをえず廊下にケーブルを出して機材をセットする。以後研究室棟3階の廊下がスタジオになる。偶然のことだったが、通りがかりの人を巻き込んで放送するというかたちのきつかけになった。

室内に場所があれば、つねに機材をセットしておけるし、通行人にまどわされずに企画性のある放送ができるという利点があるので、廃車を一台持って来て固定したステーションにしようという計画もある。しかし、通路上のラジオ局というのは捨て難い。通りがかりの人々のさまざまな反応を得ることができる。奇異な眼差しで近づいて来る人は多いし、フリートークへの参加も期待できる。

当日は、通りかかった顔見知りを含めてパティの様相を呈する。

十二月某日 サロンへ行くとゴミ箱の上にラジカセが置いてありR&Bが流れている。土曜日なので人は少ないが、曲のあい間のS君の語りに笑い声此起彼伏。聴いているというのは、おどろきに近い。スタジオへ行くと、モニターにパンツがかぶせてある。誕生日のプレゼントとのこと。小生もくつ下を差し上げる。

十二月某日 DJ番組の新しいスタイルを開発したK君の受け持ち日では、一曲かけるごとにその場の全員にマイクを回して、感想を語ってもらうことになっている。「時間のムダとか下らないとか一言どうぞ」

DJ風の放送をやっていると「キッズ」の真似ですか?と言われることもある。近頃は地方都市にまで波及した風俗営業派ミニFM局のイメージと重ねて見られても困る。音楽にこだわるというのはラジオポリバケツのほんの一面でしかないのですから。

### 自分サイズで何ができる

十一月某日 フリーラジオ局開設のミーティング。「このあいだの、バイキンがわいてくるようなあれでいいんだよね」との発言あり「ラジオポリバケツ」と局名決まる。

十一月十日 ラジオポリバケツ初放送のポスターをつくる。T君がスケッチブック一冊分パステルで書きなぐってきたカラフルポスターに感激。フランク・ステラのポスターの上にはる。学内でも普段歩かないところまで回って新鮮。ガムテープのくっつけっこをするなどしてはしゃいだ気分。

十一月十二日 放送開始、それぞれ顔見知りラジオを持って来るように頼んでおくなどする。

12時30分、放送開始。すでにラジオを持ったサクラがサロンなどをウロウロしている。内容は、DJ、フリートーク、インタビュアーテープなど。話題が主にフリーラジオについてというの妙な感じもする。各研究室、サークル部室棟、学生サロンなどの聴取状況が刻々報告される。スタジオは作戦本部の様相。

昨年のおつごころであったかは忘れた。新宿の歌舞伎町にある友人のアパートから電波を飛ばしたのが、とにもかくにもコトの始まりだった。粉川哲夫さんからラジオポリバケツの話や今回の実験が電波法の範囲を越える「海賊放送」でなく合法なものであること、このような五〇〇m範囲のマイクロな放送局が増殖することによって生まれる可能性などの話を聞いて事の内容は理解していたが、かといって僕の参加は積極的なものではなかった(そしてこの時、何故積極的でないかもはっきりはしていなかった)。電波は思ったより飛んで、ラジオを持って夜の町を歩くのは少し面白かった。しかし僕にとってその事はそれだけのことであり、その後、みんなで飲んだ時、送信機を買うと言ったことも単に酔った上での乗りすぎなかつた……と思う。

しばらくして送信機が手元に届いた。この際手に入れてしまうことはよいとしても、これを手に入れたことでせねばならないことができてしまった気がして、なんとも重々しく感じた。積極的になれない理由についても考えてみた。ひとつはハードウェアの問題で、使い方の習得にそれ程時間がかかると思え

十一月一九日〜二十二日 学祭でも放送する。当初は各メンバーの受け持ち時間を決めておくにとどめる。DJ、対談、語りなど、自分でつくったテープが流されるが、いつしかオープンになって、スタジオに立ち寄った人々のフリートークが延々と続くなかに、さまざまな学祭企画のPRが割り込むことになった。優性保護法反対のシンポジウムといったものから、ヒマな飲み屋の客寄せまで。いくつかの模擬店が店頭で流しておいてくれるので、スタジオへの出前を頼むといったこともあったようだ。お祭り気分の中、毎日放送することに決まる。

十二月某日 月曜土曜のフォーメーションが決まる。昼までに機材をセットするが一人廊下でマイクに向かうのはいかにわびしい。通りかかったF君をつかまえて「学内状況」についての対談に持ち込む。F君が授業があるというので今度はNさんをつかまえて「女性問題」の対談を始める。某研究室で聴いていた某君より「おもしろいね」の反応あり。うれしい。

なかったが、はつきりいつてめんどうくさかった(車に乗るのは好きだが運転はキライだというタイプ)。もうひとつは、こんなマイクロなものがなんの有効性をはらんでいるのか?という不信感とでも言うようなものがやはりあったし、こんなことにかわりあって自分の時間を使うより、黒人音楽の有効性について考えている方がはるかに身近で生々しく思えた。

しかしそういった否定的な面ばかりでなく機械を手にしてから——そしてゼミの中で数回実験するうち——あんがい面白いオモチャになるのではないかという思いも出てきた。単絡的に黒人音楽とラジオとを線で結んだ。友人数人とやったエコーマシンを使った「ダヴ実験」なるものも面白かった。何よりも自身が閉塞状態で身動きがとれない感じがしていたから、何かについて考えるのでなく、動きの方からケリをつける方向が欲しかった。ハードウェアの方もマニュアルを手に入れたら、僕以外の人間がすぐに習得してしまったりでそれほど重くなくなってきた。

これらのことがどういう順番であったのかはよく思い出せないが、こういうことが数ヶ月の間にやったことの大半を占め、いつしか

ラジオは意味を伴ってやってきたものでなく、そういう僕にとって面白いと思えることを結びつける機能とでもいった風に映っていた。

いま書いていて、ほんの数ヶ月前のことを思いだせずにびくびくしているのだが、当初にあったフリーラジオ経由の理念的なものは、広がりだけを残して磨滅していった気がする。

僕自身、今まで書いてきたような経過でラジオに感じていた重荷をおろし、自分サイズでそのことを考えられるようになったところで、学祭を契機に学内でラジオ放送を持続的にやっていこうと積極的な展開に出たのは、「自身の語りを切り開くこと」つまりオーラル・レベルの活性化が念頭にあったわけで、それはフリーラジオが目指すものというより含んでいた部分といった気がするし、実際いまは聴取者を組織すること、多局化といった問題にいたる以前のそうだった、つまり行為、僕がどうするか？ということが相変わらず僕の中で問題なわけである。

学祭で3日間連続で放送した時、面白かったのはむしろそうだった側の動きで、廊下に機材を持ち出すこと、一日中チャンネルが開きっぱなしであることは、聴かれた上で何らかの方向を作り出したのでなく、むしろその解

放区的空間を使ってさまざまな語りが開かれたことが記憶のすべてになっている。比較するものがないから大げさにとらえているのかも知れないが、維持しているというあまりうれしくない感覚にそれほど気がつかない3日間ではあった。

さてこれらのこと——といってもホンの数ヶ月間のこと——があった後、いま現在「ラジオポリバケツ」はどうしているかと言えば、放送している。僕自身、今年は卒業してしまおうので今後のことなど多少考えたりもしているが、いまは思うに、初期の思い入れも全部だめになって、やったことだけが素直に落ちているだけである。そこからシカケていくことも考えねばならないし、しかけるからにはプログラムのことももう少し考えねばならないだろう。しかしその中で荷をおろすように、仕事が進んでいく、つまり発展的にひとつずつのことが終わっていくと少し違ってくるし、しゃべることは相変わらず問われなければならぬと思う。

僕自身が担当する土曜日の「マミーのパカヤロソウル」もタイトルから「ソウル」をおととして「マミーのパカヤロー」にしよう

### ク」の公開読書会 土曜日 マミーの「パカヤロー」

ただしこの一月から、水曜日は、ラジオFの担当者の都合で中止になってしまったので、現在は空白になっている。

各番組の説明をすると、「難儀な日曜日」というのは本江くんがなにかしら話題を持って来て、それを放送するその語り口を放送したいわけである。話は生活風俗についてのものが多い。題はカフカの言葉からとられているということが多い。

「火曜日の歌謡曲」は、中島くんというアイドル歌手が好きでその手の曲をかけるが、その世界の話をするわけだが、本人のめり込み方が異常ともいえるだけに放送も異常といえるかもしれない。

ラジオFというのは武内さん（女性）がやっているラジオ局で、学内での出来事についてとかマスコミで扱われた出来事について分析したり、批判したりしている。普段は90MHzで放送しているのだが、水曜日は出張放送してくれていたのだ。

「ドブワイズバケツ」は僕と小畑くんが担当していて、私事にまつわる気ままな話のあ

いまにドブ（Dub）という音楽をかけるという番組と言えるだろう。

金曜日には、現在はイリイチの「シャドーク」の一月から始まったばかりで、その前はラジオポリバケツ関係者が全員集まって放送することになっている日だった。全員といっても四五人しか集まらんないんですけどね。

「マミーの『パカヤロー』」には、齋藤くんが自らの貴重なコレクションをオンエアしながらべらんめえなDJを展開するという番組。今年からは心を改めて、「パカヤローソウル」から今の題にしたそう。

ラジオポリバケツの関係者はだどってみるとかなりたくさんいることになる。アンテナを張る時にだけ来る板垣くんとか、あいさつをまめにしに来る津田くんのような人がたくさんいるわけだ。しかし、実際にマイクを取る人はそういう人と何が違うのだろうか。実際の放送の時には、日によってはいろいろ人が来たりして、何が放送で、どういうものはやってくる誰にもわからないくらい落ち着かないものとなってしまふ。

というのがラジオポリバケツの日々の姿になるわけか？

思う。深い理由があるのでなく、「ソウルでなくともいい」という気持ちを反映しただけだ。性格がどのように変わるかはわからないが、何ができるかというところを「出さざるえない」方向にしていきたい。（齋藤正樹）

### ラジオポリバケツの番組表

ラジオポリバケツは、月曜日から土曜日まで担当をふりわけてFM76MHzで毎日放送している。放送していることは次のようなものだ。

- 月曜日 難儀な日曜日
- 火曜日 火曜日の歌謡曲
- 水曜日 ラジオF出張放送
- 木曜日 ドブワイズバケツ
- 金曜日 I.イリイチの「シャドーク」

しかし、実際に放送そのものはまだほとんど聞かれていないようだ。そのため、放送しているとりとめのない今はあるが、番組にしても、自由ラジオそのものにしてもその先はない。思うには、自由ラジオというもののスイッチを入れてみようと思うような、そのようにちゃんと退屈している人はまだそんなにいないのじゃないかということだ。まだまだいろいろなものがあるような手段を使わなくても手に入ったと思いつめるだろうからだが、自由ラジオ自体二者択一というものじゃないんだ。ラジオにかぎらずさ。

ラジオポリバケツの今後の展開というものは、自由ラジオのスイッチを入れる契機としての放送ということになるのだが、それはラジオの中だけの架空の姿というのではこまるわけである。

待てよ、ということを出てくるものということになるわけだから……と考える君だって、別にあつたまいわけじゃないんだよ。

# 壁新聞「同時代」一部二百円

「同時代」編集部

少しまえまで、「同時代」というのは一種のはやり言葉というか、キーワードというかなり身近かな言葉ではありましたが、でも、実は何の「同時代」かというと、そのころはほとんどわからないという、実にアイマイ模倣とした、まるでプロレスのような言葉なんです。

実に、この新聞も、その名前同様、何となく身近かなようできて、しかし、かなり硬質なようであって、一見苦々しそうで、その実かなりの年輪(?)が感じられるという不思議な新聞なわけです。

本当は、この新聞を出すにあたって、その性格づけにかなりの苦労をしたわけですが、新聞でもなく、雑誌でもなく、月刊の壁新聞というに近いもの(そう言っても何だかわからないけれど)を考えてきたわけです。

壁新聞にふさわしく、一面は橋本勝さんの二色刷りイラストで、これを額に入れてかざっておくと、非常に見映えがするわけです。

同じく8面では、この人が、こんな人がという有名な人、変わった人、偉い人(?)、全然知らない人に直撃インタビュー。これなんか、通して壁に貼っておくと、交友関係がやたらとふえてきた感じがするわけで、実にお得なお買いものという事です。

そればかりではありません。次々と特色が出てくるわけですが、何といっても多様な主張、多様な思想。高橋悠治さんから宇崎童童さんまで。すみずみまで科学的な思想というのはちよつと少ないけれど、人もいやがる「社会主義」から、秘儀参入の純粹思考まで。オカマの話から、反核運動まで。実に雑多な壁新聞というわけですが、ちよつと見る

と、そんなふうにも見えないところが、ニクイところでありませう。

冗談はともかくとして、「同時代」にはキーワードのコーナーというのがあって、そこで最初に(実は最初にして最後)とりあげた言葉が「対抗社会」というものでした。「同時代」というのは、あらゆる人々にとって、それぞれのもつ時代感覚、時代認識が幾層にも重なりあうような時代として、そういう意味では、全く同時代性が人々の中に存在しないという逆説的な言葉なのでしょう。

そこで、「対抗社会」というわけなのですが、こんな時代に、最低限、人と人が重なりあうところがあるとすれば、そこには生活や本来的な意味での人と人との結んだ「社会」が芽ばえる可能性があります。そういう血の

通った関係の中に「同時代」という言葉が生まれてくるのだろうし、それは期せずして、ある種の「対抗」関係の中に置かれていくことでしょう。

文字であろうと、音であろうと、あるいは映像であろうと、そうしたものが媒介機能を發揮したところに、生まれるものを予想しつつ、しかも直接宣伝(アジテーション)でない「媒体」などというものを夢想しているわけがあります。

これ、これ、お前達、同時代を知らんか。へエ、どんな同時代で。

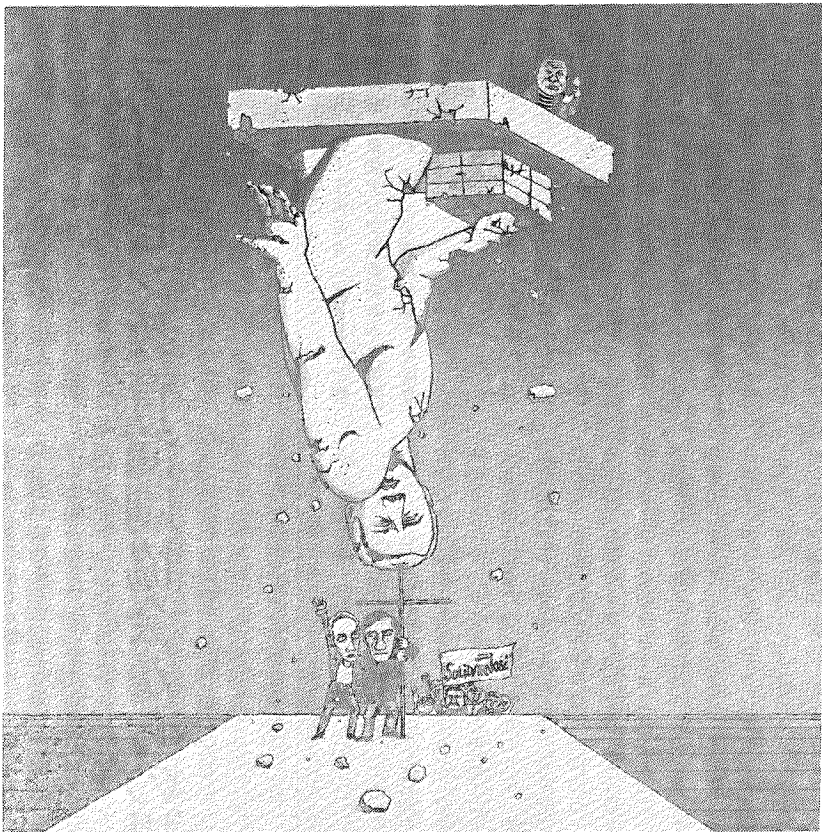
そこにあるだろう、そのタイコ横にある三尺のやつだ。

これですね、我と来て遊べや羽根の同時代と、ハイ、だんな。

フム、いくらだ。  
ハイ、二百円だ。

安いな、ひとつもらおうか。  
エ、まいどー。

売れたね、売れましたよ、私もなりたい同時代と、売れるねコリヤ。ヨイショオー。



# フィリピン教育演劇協会からの提案 マニユエル・パンビット

① PETA-CITASA (フィリピン教育演劇協会—東南アジア演劇芸術中央機構) は、なぜATF (アジア演劇会議) を提案したのか?

ATFがどうやって形成されたかという背景を手短かにのべれば、この問いにたいする回答の一助になるかもしれない。

一九七六年の夏(四、五月)、タイの演劇人たちが私たちのコミュニティ・シアター・ワークショップ「演劇のつくり方」に参加した。そのうちの一人は、ほかのメンバーがフィリピン社会の現実を見る観察旅行にでかけていた間も、全コースに参加して身体訓練やマ

イムをおしえた。

一九七八年、インドのライプールで開かれたアジアの演劇人たちのあつまりで、PETAのレミ・リックケンが、日本の黒色テントからきた堀田正彦に会った。一九七九年、堀田は二つのグループとともに二度フィリピンを訪れた。ひとつのグループは「演劇のつくり方」の三日間ワークショップに、もうひとつのグループは夏の全コース(六、七週間)に参加した。一九八〇年には、レミ・リックケンの努力によって、日本、インドネシア、マレーシア、タイ、インド、フィリピンの演劇人たちが、PETA-CITASAの夏期ワークショップに参加した。

おなじ一九八〇年八月に、CITASAのチームが文化交流のためにマレーシアとインドネシアを訪れた。かつてワークショップに参加した人びととその後のことを話しあい、また、それぞれの土地の必要に応じて総合的な演劇技術をおしえるためだった。このチームはシンガポールの文化団体とも話しあいをもつことができた。

こうした経験をへてATFは発展し、一九八一年の夏に私たちをととのえた。その基本構想は以下のとおりである。

「演劇の仕事をおしえるためにはどうすればいいのか。その訓練をおして、アジアの諸国からあつまつてきた、教育や社会や地域や

演劇の活動にかかわりをもつ人びとを一つにつなぎあわせ、それぞれの国における社会的・政治的・文化的状況、民衆とむすびついた現実的活動について意見をかわす機会をつくりだす」

その後の数カ月のあいだに、出張ワークショップや交流プログラムがマレーシア、シンガポール、タイ、パプア・ニューギニアでくまれ、同様の活動が日本や韓国でもすすめられた。一九八二年にはインドやスリランカでもおこなわれた。

おおくのことが実行された。それによって、さらにおおくのことをやらなければならぬ必要が生じてきた。これまでPETA-CITASAがやってきたことがまちがいでなかったことを示す無数の理由が見えてきた。

(1) PETAとしては、フィリピン社会のさまざまな場所におけるワークショップをつうじて獲得してきた基礎的な演劇技術の教育方法をわかちあいたいと望んでいた。ここ数年間の実践をへて、いまCITASAのスタッフ(教師たち)は、アジア各国からの参加者

たちの意見によって、その教育方法・水準をいっそう高めることができるにちがいないと考えている。PETAがわかちあいたいと思っている教育方法は創造的かつ解放的で、第三世界のひろがりにもとづくものだ。

(2) アジアの人びとは文化的な交流をすすめたがいに影響をあたえあうことによって、自分と自分の社会について、これまでよりも深く、おおくのことを知りはじめている。PETA-CITASAは、一九八〇年の夏期ワークショップではじめてアジアの人びとと出会い、われわれがアジアの友人たちについてまったく無知であったことに気づく手痛い経験を味わった。CITASAがATFを提唱したのは、まずだれかが手を差しださなくてはならない必要を痛感したからである。

(3) ATFはまた、演劇というものを、変革と解放をめざす社会的な抵抗や意見発表やコミュニケーションのメディアであると主張する「発展のための会議」でもある。われわれは教育と意識化と社会的行動のために演劇をつかう。この観点と、PETA-CITASAがアジアの人びとと協力してきざずきあげてきた

もの、ワークショップと対話をおして連帯を組織化していくこと——それによって、人間の資源の開発に責任をもつアジア人の中核的なグループをつくりだすというヴィジョンを現実化することができよう。

② 一九八〇—八二年のアジア各地におけるワークショップと文化交流、さらにマニラで開られたATFによって、なにがあきらかに変わったのか?

言語と文化のちがいにいかかわらず、ATFをひらくことは可能であるという事実があらくなった。PETAの教育方法をそれぞれの社会的・文化的文脈や、参加者の必要におうじてつかいこなしていく——それが不可能ではないことがあきらかになった。言語と文化は決定的な障害ではない。われわれは芸術的表現とコミュニケーションのための共通の言葉をつくりだすことができる。

アジアでひらかれたワークショップによって、それがどこにおいても実につかひやすく、参加者たちによってすすんで受け入れられていく方法であることが証明された。ほとんど

の場合、参加したのはおなじ社会的背景、言語、文化をもつ小集団だった。そこでワークショップの成功は、進行に責任をもつCI TASAと現地のスタッフが、参加者たちの要求をきちんと把握していたことによる。通訳は決定的な役割を果たす。理想的にいえば、通訳はワークショップの方法をよく知っていなければならぬ。これらのワークショップでは、表現過程に重要な意味をもつ即興性がいきいきと発揮された。

ATFでつくられたつながりを基礎に、いくつかの場所での社会的関心をもつ芸術家たちの連絡網ができあがりつつある。アジア各地の演劇専門家や教育・社会活動家たちの連帯をつくりだす。その責任をPETA-CITASAだけにではなく、ほかの人もわかちもってほしい。

③一九八三年に日本でひらかれるATFによつて、どのような発展を期待するか？

PETAとしては、これまでのATF参加者の経験をさらに強化していくことを期待する。一九八三年度のATFは、かれらがそれ

演劇を進展させ、創造していくことだ。

ATFのどのメンバー（個人、集団、民族を問わず）も、文化交流と相互の影響関係を先導しうる。だれもが交代でリーダーシップをとることができる。参加者たちのコミュニケーションの中心となつて行動するため、ATF事務局を組織してもいい。他の文化に押しつけることができるどんな文化も存在しない。それぞれが分かちもち、まなびあうことのできる民衆文化に、たがいに敬意を払いあうことこそが重要なのだ。ATFのメンバーは、それぞれの国での民族的な演劇運動のための活動のプログラムをはっきりと示さなくてはならない。

なによりも重要なのは、ATFのメンバーが自分自身の文化的ルーツやアイデンティティをよく知っていることである。われわれはたんに芸術的技術の交換のためではなく、真にアジア人のものである文化（われわれはアジアの伝統と経済という共通の基盤に立って仕事をしている）を交換しあうために集まるのだ。

ぞれの国でおこなっている活動を総合化し、共有化することをめざすにちがいない。すべての参加者はさまざまな疑問や意見を自由にのべ、こうしたらいいという提案をおこなうだろう。これからの計画についても同様である。さしあつた希望をのべるなら、PETAがフィリピンで、黒色テントが日本でおこなっているような仕事を、それぞれの場所でおこなっている演劇集団がガツツリした連帯のもとに現われてくるといいのだが。

日本でひらかれるATFは、日本人とその他のアジア人参加者が相互にまなびあう機会になるだろう。

①日本の人びとは、その他のアジアの人びとがおかれた状況と現実を本当には知っていない。だから他のアジア人が日本人をどう見ているのかを知ることが、日本人にとって大きな経験にちがいない。

②またアジアの人間たちにとつても、黒色テントのメンバーや社会的関心をもつ諸グループによつて形成されている反対制的意識の高まりを認識することは、貴重な経験になる

そのこととのつながりといえば、アジアのそれぞれの国——たとえばフィリピンがみずからの現実を自覚していることが必要だ。そうすればフィリピンは、それを他のアジア第三世界の国々の現実と関連させて考えることができる。われわれはこうした観点から、文化・演劇の技術がはたしうる現実的役割を実験してみることができる。

最後にATFが、アジアの芸術家たちがその歴史や伝説、社会的・政治的現実と直面し、真の意味での文化的変革者になるための場となることを希望する。

⑤あなた方は、こうしたあつまりをアジア以外の国でも開催する考えをもっていますか？

われわれはアジアの芸術家／教育者／指導者たちだけではなく、南米、カリブ海地域、アフリカの人びとも接触したいと考えている。民衆的・民族的な演劇運動の経験や批評を交換しあうことが重要である。われわれはたとえばアウグスト・ボアールと交流し、かれの「被抑圧者の演劇」の実践やプロセスをもっとくわしく知りたいと思う。その他の第

はずである。それは、日本においてさえ日本人芸術家による異議申し立ての場所が存在すること、日本においてさえ第三世界の意識の高まりが存在しうることを知ることなのだ。

われわれは日本でのATFに、アウグスト・ボアールやセル・ギドナなど、それぞれの国で演劇／教育／社会開発などの領域で、反体制的運動の先頭に立っている人物を招待すべきであると考ええる。もしもこのプランが実現すれば、かれらはわれわれの文化交流に具体的なスプリング・ボードを提供できるであろうし、かれらと親しく意見をかわすことによつて、われわれはよりいっそう客観的なパースペクティブを確実に獲得することになるだろう。同様に、ATFの長所と弱点を認識することができると思う。

④ATFの基本的思考はなにか？

ATFはPETA-CITASAだけではなく、共通のヴィジョンによつて結ばれたアジアの芸術家たちのネットワークが責任をもつべきものである。共通のヴィジョンとはなにか。啓蒙と教育、なによりも解放のための

三世の芸術家／教育者／指導者たちとも、これと同様の相互関係をもちたい。

しかし現時点においては、われわれの主要な関心はアジアにある。われわれはまず、具体的かつ実行可能なATFの経験をつくりださなくてはならない。規模をひろげる前に、ATFの有効な演劇芸術のカリキュラムを開発すべきだ。なによりもまず、民衆演劇のためのアジアの教育方法を実践していく。そのことによつて、われわれは他の第三世界が生みだした教育方法や演劇システムにきちんと向いあい、具体的ななにかを手に入れることができるだろう。

PETAは、おなじ一つのヴィジョンによつて結びあわれ、その実現のためにアジアの各地から力をもたらすような、本当の意味でのCITASAの発展をねがう。そのような民族演劇のネットワークをつくりあげることができればいいと思う。



編集後記

ことしの夏——八月十日から二週間、東京を中心に「ATF83」というあつまりがもたれる。数年まえから、アジア各地の演劇活動家たちがあつまりてひらいてきた「アジア演劇会議」の第三回目、フィリピンや韓国やインドネシアやタイから、四十人ほどの人びとがやってくる。東京のほかにも、日本各地のさまざまな生活の場、運動の場で、集団的な発言手段としての演劇の可能性をさぐる。

本号にのせた呼びかけ文の筆者 マニエル・パンビットはフィリピンの若い劇作家で、PET A(ペタ)という略称で知られるフィリピン教育演劇教会の中心的な活動家でもある。もよおしの詳細や日本ですめられている準備活動についてもおいおい報告するつもりだが、関心のある方は黒色テント 68/71に連絡していただきたい。

電話番号は〇三(九二六)四〇二二。

自由ラジオの動きはさまざまなかたてひろがりつつあるが、今号では「セタガヤ・ママ」と和光大学の学生たちの活動ぶりを報告する。各地の実験についてもいろいろおしえてください。

同時代の民衆史を記録

◎中国に興る新しい伝記文学/ジレミー・パーマー

「小さな私」の正視と肯定、分析こそ、中国の将来性ある作家、インテリが人生を理解し、社会を認識して「人間の条件」を発掘する道であろう——と、現代中国における文学作家の望まましき姿を追求する。

◎沖縄——座間味島にて/真尾悦子

いくさの話をするなら、ひと晩でもふた晩でも尽きんですよ。あんまりいい時代になって、信じられんかも分からんけどね——語りつがれていくあのいくさ世の歴史。

わが子は異郷にあり②/わいら河内の若衆や/ユーモアと老舎/「北游日乗」——鷗外の旅(1)/中国への距離(4)

2月号 凱風 No.4

◇お申し込みは左記あるいは、お近くの書店へ。

◇年間購読料(六回)一八〇〇円(送料共) 隔月(偶数月)発行

◇一冊定価 二〇〇円  
〒一〇四東京都中央区銀座一  
二〇一二 松村ビル四階

株式会社 凱風社  
電話〇三—五六七—五〇三〇

購読の御案内

\*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

\*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

\*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第五巻第二号

一九八三年二月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

(八巻方)

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 ㈱トライプリントショップ